

# マーシャルの国際貨幣論

大 原 静 夫

## 目 次

はじめに

### I Bale

- ① 相互需要表
- ② 相対価格と貨幣価格
- ③ 商品輸送点

### II 購買力平価説

- ① 個別的購買力平価
- ② 一般的購買力平価
- ③ 信用貨幣

## はじめに

マーシャルの国際貿易論をケインズは「古典派的二分法」として批判しているが、R. マンデルによれば今日でも古典派の貨幣理論と物々交換理論との統合は成功しておらず<sup>1)</sup>、而もその主な原因は「ケインズが理論的貢献をすることを望んでいた当にその分野、閉鎖経済に於ける貨幣的部門と実物的部門との統合に於ける彼の試みの欠陥<sup>2)</sup>」にあると云う。

この様なマーシャルの国際貨幣論を本稿では考察しよう。

1) 事実、今日の代表的教科書、キンドルバーガー「国際経済学」(p. 21)、小宮・天野「国際経済学」(p. 7)も古典派的二分法に則っている。

2) R. A. Mundell International economics p. 112

# I Bale

マーシャルは国際貿易を自然的・人為的生産条件が異なる隣接二島 (E, G) 間の交易に準らえて次の様に説明している<sup>3)</sup>。

## ① 相互需要表

### (i) 交易条件

E, G 両島に於ける運送可能な商品を標準労働で測定してその実質費用 (real cost)<sup>4)</sup> を P, Q...V の7つの商品グループに類別しEのGの商品に

(1表)

Pに就いて	G島では	16人
Q "	"	12
R "	"	11
S "	"	10
T "	"	9
u "	"	8
v "	"	6

(2表)

	P	Q	R	S	T	u	v
E	10人	10	10	10	10	10	10
G	16人	12	11	10	9	8	6

対する比較優位性が逡減する様に並べて Eでの一日10人の労働に対するGの関係を1表の如く仮定する。

そしてGが大きな優位性をもつu, v に対するEの需要が強く、且つGがu, vをEに移出しP, Q, R, Sを移入して得られる満足が略々均等ならu, vはGでP, Q, R, SはEでのみ生産されTが両島で生産される事になって両島の交易条件は「G1日がE10/9日に相当する」(G1日 = E · 10/9日) ことになる。

この様に { E島...P, Q, R, S, T } が生産され { G島...u, v, T }

が生産されている時にu, vに対するEの需要が増加してもEがP, Q, R, SのみならずTに対するGの需要をもすべて充たす限り此のレートは維持される。

更にEの需要が増加すると、もはやTはGで生産されず交換比率は 10% → 9% → 8% → 7% → 6% → 5% = 10% (uの比較生産費率) とEに不利に転化し、uはEでも生産され始めるが此のレート (G1 = E10%) はuが両島で生産さ

3) Marshall Money Credit & Commerce (McC.) p. 321 以下。

4) マーシャルは商品を作るための種々の労働の労苦及びこれに利用した資本を貯えるための節欲等これらを商品の real cost と云ひ、これら労苦と犠牲に対して支払われる金額—money cost とを区別する。猶、ここでは労働価値説を所与とし、これについては後述する。

れる限り維持される。そしてマーシャルは

How far will the movement go? The answer depends on the relative elasticities of the demands of the two islands for each others goods (McC. p. 177)

とこの変動が需要の弾力性<sup>5)</sup>によって規制されると云う。

(ii) 相互需要

マーシャルの相互需要表は需要面に於ける等価関係を前述の交易条件の変化につれ例えば2欄の交易条件が上から下へEに有利化するにつれ3欄

(3表)

第1欄 E包(bale) の量	E国が欲する貿易		G国が欲する貿易		
	第2欄 E包100と 交換して得 ようと欲す るG包の量	第3欄 第1欄のE 包量と交換 して得よう と欲するG 包の量	第4欄 E包100と 交換して与 えようと欲 するG包の 量	第5欄 第1欄のE 包と交換し て与えよう と欲するG 包の量	
10,000	10	1,000	230	23,000	
20,000	20	4,000	175	35,000	
30,000	30	9,000	143	42,900	
40,000	35	14,000	122	48,800	
50,000	40	20,000	108	54,000	
60,000	46	27,600	95	57,000	
70,000	55	38,500	86	60,200	
80,000	68	54,400	82½	66,000	
90,000	78	70,200	78	70,200	
100,000	83	83,000	76	76,000	
110,000	86	94,600	74½	81,950	
120,000	88½	106,200	73¾	88,500	
$\frac{100}{(2)} \times (3)$		仮定	仮定	$\frac{(4)}{100} \times (1)$	

Bale(包)は1国の労働と資本との均質的、総合的投資物であり、輸出入品の代表的単位である。

のEのG商品への  
輸入需要量がふえる  
等の手続きで作成さ  
れたものである(3  
表)。従って茲では  
需要の裏返しとして  
の供給は生産の理論  
を背景とした供給数  
量ではない。これは  
隣接する二島と異な  
りイギリス、ドイツ  
等の国際間では生産  
要素の移動が自由で  
なく、この場合には  
後述する如く国際経  
済的均衡は相対価格  
に於てではなく生産

5) マーシャルは弾力性をeとすると  $y^{e-1}$ (輸入) =  $cx^e$ (輸出), ならびに所謂マーシャル・ラーナーの条件  $e+e^* > 1$  (但  $e^*$ は相手の弾力性) を導くが、貨幣論の論考なので、これは割愛する。

関係を除外した貨幣価格上の市場関係的均衡に過ぎないとの認識によるものである。次にこれを

The unsuitability of *gold as a measure of value* in international trade, arises mainly from the fact that gold is itself moved freely from one country to another by the direct action of trade: while *the supplies of labour and capital cannot move* with equal freedom (McC. p. 157)

のうち「価値尺度としての金」と「労働と資本の移動」とに別け先ず後者から検討しよう。

## ② 相対価格と貨幣価格

生産要素の移動の困難が貨幣論上、どのような意味をもつかをヴィクセルの「利子と物価」3章を参照して整理すれば次の様になる。

### (i) 貨幣価格と商品市場

完全競争のもとでは(1)消費の面では各人はその所得を各商品に限界効用が均等になる様に配分する。(2)生産の面では企業者はA・B産業で利潤率が均等になる様に活動し、労働その他の生産要素は報酬率が各産業で等しくなる様に配分される。そして消費と生産とが交換によって結合されれば

$$\frac{Aの価格}{Bの価格} = \frac{Aの限界効用}{Bの限界効用} = \frac{Aの限界生産費}{Bの限界生産費} \quad \text{と云う関係が成立}$$

する。

そして此の場合、貨幣の役割は純粹に媒介的なもので、云はばヴェールである。

別言すればこの事は「商品交換そのものと、その前提条件たる財貨の生産及び消費の状態とは単に商品の相対価格に基準を与えるが貨幣価格の絶対的高さには何らの直接的影響を与えない」ことを意味する。

例えば、ある商品が技術の進歩の結果、従来より安く生産される場合、当該商品の貨幣価格がそれ以前の相対価格と現在の相対価格との全差額だけ下落するとは限らず逆に上昇することさえある。

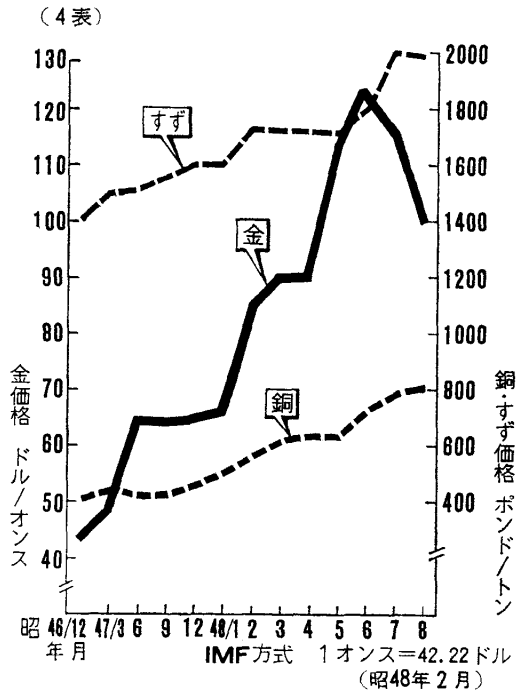
一般には此の関係は当該商品の需要と供給との時間的順列 (zeitliche Reihenfolge) によって左右され更にかかる時間的順列はそれ自身貨幣市場の現実の状態如何によって左右される。

そして貨幣市場が緩漫<sup>6)</sup>ならば需要は瞬時に増加するが供給には「調整ラグ」があり貨幣価格の騰勢に拍車をかける。この場合、貨幣価格の規制者は相対価格のそれとは異なり商品市場(又は財生産)の事情そのものから生ずるのではなく、この商品市場の貨幣市場に対する関連のうちに求められる。

具体的には一般物価水準が高すぎる時、それに対する規制は貨幣として役立つ商品(金)がそれら自らの使用財として現はれる特殊な市場(4表)でその交換価値を獲得するか(貨幣生産費説——ドルの兌換)今1つは周知の貨幣数量説と関連する。

(ii) real cost と money cost

「財貨の価格はその生産



6) 国際流動性の推移 (単位億ドル)

年	1969 (A)	1970	1971	1972	1973(3月末) (B)	増減 (B-A)
金	391	372	392	388	431	+ 40
D R	0	31	64	94	105	+105
IMF ポジション	67	77	69	69	75	+ 8
外貨計	325	447	781	1,026	1,162	+837
合	783	927	1,306	1,577	1,773	+990

最近3年間に国際流動性は著増している。

費を基準として動く」という命題は自由競争のもとでは生産要素の報酬、即ち賃金、地代、利潤が凡る事業に於て同一の高さを要求し絶えず均衡を求めて生産要素が移動すると云う認識の系である。

そしてこれは相対価格が問題の時にのみ妥当する。従って生産要素の移動が困難な国際経済的均衡は生産関係が除外された市場関係的均衡に過ぎず、かかる観点からマーシャルの相互需要表は理解さるべきだろう。

これをマーシャルは

Recardo proceeded to emphasize and explain the divergence of the relations between money values and real costs in places between which the migration of labour and capital is not easy. Such divergencies are not peculiar to international trade; but they are exceptionally prominent in it (McC. p. 108)

と云う。

以上で資本と労働の移動が困難である事の考察を了え、次に価値尺度としての金を検討しよう。

### ③ 商品輸送点

#### (i) 価値の標準 (a standard of value)

標準労働の設定は二島間では、ともかく国際間では不可能なので媒介手段として金が登場する。ポンドも円も共に金に結付いて居れば相互に比較が可能となるがマーシャルは

Equal gold costs in different countries have no general tendency to represent equal real costs in both (McC p. 157)

と云う。

貨幣制度の結果、金の価格(例1匁=5円)が確定すると、此れと金の価値(購買力)との乖離は貨幣と金との間に転換が行われる事により、その価格に収斂し、一方、他の財貨の市場(貨幣)価格はその自然(相対)価格に落着いて行く。

そして需要(金)が自由に国際間に移動するのに対し財貨の供給(資本

と労働)が相対的に不変なら、購買力としての金の価値は或時は低く或時は高く変化する。

そこでマーシャルは合成本位制 (Synmetallism) を提案するがこれはハロッドによれば通貨単位との兌換を単なる2商品(金・銀)から一定範囲の諸商品に拡大することにより容易に商品本位制 (Commodity standard) に転化する<sup>7)</sup>。

これは政策的には金本位制のもとで金の価格が一定率以上に変動するのを防いだのと同様に合成商品の価格が正常水準から上下に一定比率以上に変動することを防ぐ事にも通ずるが、茲から「商品輸送点」という概念が導かれている。

(ii) 鉛輸送点 (lead point)

イギリスがフランスに対し貿易差額が (on the balance) 輸入超過で為替相場がフランスに順な場合、フランス宛手形にはプレミアムが付くが、イギリスの輸入商人はその代金決済を(1)プレミアム付きポンド(2)金の現送(3)商品の輸出のいずれかで行う。

この際イギリスから金が流出して、これ迄輸入品目であった例えば鉛の (5表) 輸出入品の円ドル比率 (24年1月末) 価格が彼等が輸入したいと思

輸出品	対1ドル	輸出品	対1ドル
綿糸	250	鉄 鋳石	125
生糸	420	塩	103
綿織物	250~420	強粘結炭	178
毛織物	350	小麦	165
自動車	430	棉花国内用	80
自転車	510	〃 輸出用	250
鋼船	500	生ゴム	154
棒鋼	240	りん鋳石	154
かん詰類	300	化学薬品	200~350
皮革類	580	銑鉄	67
苛性ソーダ	200	羊毛	120~140
陶磁器	600	重油	284

鈴木武雄 現代日本財政史 下巻1 p. 108.

うフランスの商品価格より低下する事がある。

それで手形プレミアムが金輸送費に等しい時、金輸送点 (gold point) に、両国に於ける鉛価格の差額がこのプレミアムに等しい時、鉛輸送点 (lead point) に達したと云う。(McC. p. 227)

この関係から発生する為替相場は、いわゆる等価採算レ

7) Harrod Money p. 331

ートであり、第2次大戦後、昭和24年4月に1ドル=360円の為替レートが設定される以前に見られた複数为替である(5表)。これが為替相場の基本<sup>8)</sup>でありその総合としての一般的購買力平価による単一の為替相場はいはば抽象的な基準に過ぎない。

## II 購買力平価説

シュンペーターは為替相場決定の根拠が「金の機構が捨てられて其の背後に商品輸送点が現れる時に本質的なものが窺知される<sup>9)</sup>」と述べるが此の「商品輸送点」に対応する為替理論が購買力平価説である。

マーシャルは(1)通貨がどちらも同じ金属基礎に立つ国(2)通貨が違った金属基礎に立つ国(3)貴金属が通貨の基礎となっている国と不換紙幣の国、という三つの場合に為替相場が決定される態様を検討するという形で為替理論を述べるが(Mcc. p. 225~233/315~320)、それは

The ratio of the price levels between any two countries constitutes a norm towards which the rate of exchange between them will tend to converge<sup>10)</sup> (Mcc. p. 315)

と云う「購買力平価説」である。

次にこの説の特徴を見よう。

### ① 個別的購買力平価

隣接二島に於ける商品A、Bの貨幣表示価格を  $a_1 b_1, a_2 b_2$  (6表) とすれば二島間取引に於ける利潤は

(6表)

商品	A	B
E	$a_1$	$b_1$
G	$a_2$	$b_2$

$$A \text{ 商品} \cdots b_1 \cdot \frac{a_2}{b_2} - a_1$$

8) 山口 茂; 国際金融, p. 7.

9) シュンペーター 経済発展の理論(中山・東畑訳) p. 275.

10) Eshag From Marshall to Keynes p. 26.



B 商品…  $b_1 - \frac{a_1}{a_2} b_2$  11)

となる。又この利潤がリンク取引によって輸入商と輸出商とで折半されると

A の輸出価格は  $a_1 + \frac{1}{2} \left( \frac{a_2 b_1 - a_1 b_2}{b_2} \right)$ 、これが G の  $a_2$  に対応<sup>12)</sup>するから為替相場(R)は

$$R = \left\{ a_1 + \frac{a_2 b_1 - a_1 b_2}{2b_2} \right\} \div a_2 = \frac{1}{2} \left( \frac{a_1}{a_2} + \frac{b_1}{b_2} \right)$$

然るに  $\frac{a_1}{a_2}$ 、 $\frac{b_1}{b_2}$  は商品 A、B の個別的購買力平価なので為替相場はその平均となる。

従って購買力平価説は(1)経済主体が個々の商品について其の価格を比較しそれによって輸出又は輸入を計画する個別的購買力平価に関する理論である。(2)更にこれが平均される市場機構を予想する理論でもある。

少し敷衍しよう。

具体的に存在する個々の国内商品価格は凡べて相対価格(価値)、市場(貨幣)価格及び物価水準の総合的体现者として存在している。商品価値は(1)同一種類の商品生産部門内部(2)異種々類商品生産部門相互間の問題に分けられる。

前者は同一種類の商品は一物一価の法則により社会価値で売られ、工業製品は「平均原理」、農産物は「限界原理」により生産の問題として解決される。

後者は生産部門別に異なる利潤率が資本の移動による利潤率の均等化という中間項を媒介として生産価格が成立する実現の問題として解決される。

そしてリカードは銀行制度の確立と共に資本がある事業から他の事業に銀行の媒介によって移されることにより商品の需給が調節され、貨幣市場

11)

	A 1単位を作るのに必要な労働者数	B 1単位を作るのに必要な労働者数
E	1人	2人
G	4人	5人

念の為、説明すると、左表の場合、AとBの交換比率はEでは2:1、Gでは5:4、EでA一単位を所有する人が、これをGに移出し、Bと交換すれば  $\frac{4(a_2)}{5(b_2)} = 0.8$  単位を得、次にこれを、Eに移入すれば  $0.8 \times 2(b_1) = 1.6$  単位、従って利潤は  $1.6 - 1(a_1) = 0.6$  となる。

12) 比較生産費の原理により  $\frac{a_1}{b_1} < \frac{a_2}{b_2}$  でAはEから、BはGから輸出されるため。

と商品市場との関連から物価水準が成立するしくみを述べている<sup>13)</sup>。

ところで前述の  $\frac{a_1}{a_2}$ ,  $\frac{b_1}{b_2}$  は同種生産部門に於ける類別の物価水準にはかならない。次に斯る国内市場関係が国際市場に於て、マーシャルに則ると如何に変容するかを検討しよう。

(註) 茲で個別的購買力平価を実態的に見て置かう。歴史的には外国為替問題は洋銀と1分銀との交換比率が中心の問題であった。安政以後、洋銀1枚=1分銀3枚=45匁が銀平価であったがそれが輸出超過による洋銀の供給超過のため洋銀相場が暴落し、実体価値で45匁ある洋銀が貿易採算レートとして銀目30匁代で取引される事が続いた。これは山口博士の解釈によると(ibid p. 15)横浜の売込商が1分銀3枚で内地で仕入れた商品を居留地の外国商社に3\$で売った場合、個別的購買力平価は「1分銀3枚=洋銀3\$」なので洋銀1\$=銀目15匁となる。即ち個別的貿易採算レートは銀目15匁まで下落しうる。一方輸出超過により洋銀の一般的購買力平価は35匁に下落し実体価値45匁に比し10匁の損であるが此の下落した洋銀相場を基準として輸出しても20匁の利益があり、実体価値としての45匁を要求する必要はなく、いわば購買力平価が銀平価を支配する状態である。

## ② 一般的購買力平価

鬼頭教授は「マーシャルに於ける相互需要曲線は貿易機構の究極の姿を示すものであるから、それに至るまでの凡る過程を追究する為には、その曲線の中に含まれる諸要因に遡ってそれらの間の関係が解明されなくてはならない。…それは結局、国際収支均衡化の機構に関する全体の理論を構成することに等しい<sup>14)</sup>」と云われる。

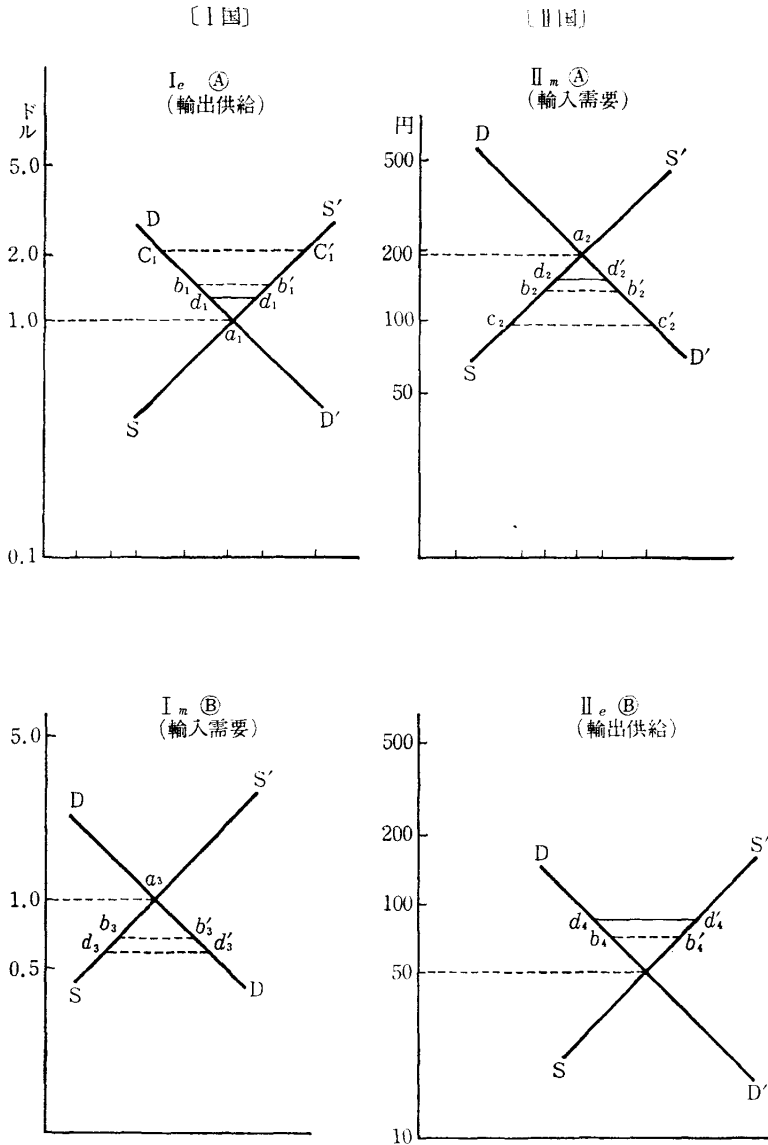
一般に輸入は国内の需要と供給との差額としての超過需要だから供給も作用して居り、2国2財の場合(7表)、 $I_e \cdot I_m \cdot II_m \cdot II_e$  の各々に需要・供給が関係するから8つの構成要素から形成されることになる。

そして国際的需給均衡は、A商品  $I_e b_1 b_1'$  (超過供給量) =  $II_m b_2 b_2'$  (超過

13) リカード; 経済学及課税の原理(小泉訳) p. 70. 猶、マルクスはリカードの功績は「資本のある部面から他の部面への移動を、というよりは、むしろその移動が遂行される運動様式をより詳しく規定している点にある。然しこの事は彼の時代に信用制度がスミスの時代よりも発達していたからにはかならない」(剰余価値学説史・マルクスエンゲル全集26Ⅱ)と云う。

14) 鬼頭仁三郎; 交易理論の基礎, p. 255.

(7表)



需要量), B商品  $I_m b_3 b_3'$  (超過需要量) =  $I_e b_4 b_4'$  (超過供給量) でありこれは常に変動する価格を以て幾度も繰返される売買の中で収斂する着着き点である。此の均衡点に於けるⅠ国のドル価格とⅡ国の円価格とから円とドルとの交換比率が計算できる。

A・Bの交換比率は複数为替として原則として一致しない(5表)。

此れは国内で完全競争条件が充たされると

$$\frac{Aの価格}{Bの価格} = \frac{Aの限界効用}{Bの限界効用} = \frac{Aの限界生産費}{Bの限界生産費} = \lambda \text{ (貨幣の限界効用)}^{15)}$$

が成立し、貨幣は一般的媒介手段ならびに価値尺度としての機能を果している。だから円・ドルの交換比率が商品毎に異なるのではなく為替相場が1つなら貨幣は価値尺度の機能を全うする。

然し輸出入商品はすべて国内商品と競争関係にあるが(i)或る商品価格がその限界効用に比例する<sup>16)</sup>という事と、(ii)この比率が取引された商品全体の交換比率に及ぶという事とは別問題であり後者はジェヴォンズの「無差別の法則」に対応し市場機構から導かれる。

そして  $I_e \cdot I_m \cdot II_m \cdot II_e$  等8要素は資本と労働の移動に関して無差別ではないので上述の方程式が成立する根拠はない。

従ってマーシャルにとっては前述せる如く国際貿易に於て貨幣は価値尺度ではなく茲に成立する均衡は恰も貨幣数量説が通貨量と財貨量との関係から常に均衡的一般物価を実現させるのと同様な関係にある。

これは、そのままでは発散的で自律的な着着き点をもたず、金本位制という制度と結合して始めて1つの完結的な収斂的メカニズムを持つことになる。

因にケインズは購買力平価説に今では誰も信を置いていないと云ひ「一方に於て我々は国家的政策上の永続的な特徴をなす現存の自然的資源、設

15) 生産面と流通面とを照応させる価格体系の均衡は効用価値説をとっても限界生産費に支えられねばならないので、リカード体系と変らない。

16) 効用関数  $U = F(q_x, q_y)$ , 予算制約式  $y^0 = p_x q_x + p_y q_y$ , とすれば効用最大化の分析から、 $V = F(q_x, q_y) + \lambda(y^0 - p_x q_x - p_y q_y)$

$$\therefore \frac{\partial V}{\partial q_x} = F_x - \lambda p_x = 0 \quad \frac{\partial V}{\partial q_y} = F_y - \lambda p_y = 0 \quad \therefore \lambda \text{ を求めて、} \quad \frac{F_x}{F_y} = \frac{p_x}{p_y}$$

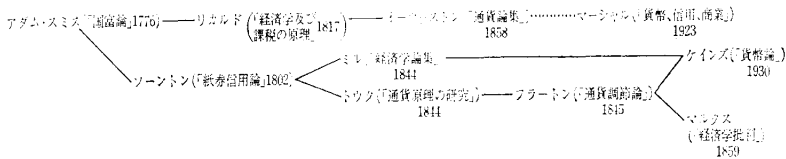
備、技術ならびに内外の生産費、正常的雇用水準および関税などを基礎として一国の所得勘定の国際収支を考慮しなければならない。そして他方に於ては今後数年間を平均してその国の対外的長期貸借について可能と思われる準備と能力を考慮しなければならない。双方のいずれにも不当な圧迫を与えず、また金の大量移動（取引の差額として）を起すことなくして設定しうる一組の為替相場こそ我々の均衡条件を満足する<sup>17)</sup>と均衡為替相場の定義を与える。

これは従来の金本位制の枠組に代えて貨幣数量説的な発散的な為替均衡に人為的な管理通貨的な枠組を与えるものである。そしてマーシャルの市場的均衡に対しケインズに於けるそれは実体面（資本の限界効率）と貨幣面（利子率）との関連を規定する流動性選好理論に基づく実物経済との関係に於ける通貨供給の「規範」に関わるものであった。

### ③ 信用貨幣

(8表)

#### 貨幣理論の系譜



ヒックスは「ソーントン、ミル及びリカードについてこれまで語って来た物語りが今日国際舞台で繰返されている。即ちそこでも金属貨幣（金）から信用貨幣へという同じ変化が進行中なのである<sup>18)</sup>」と述べるが、次に信用貨幣を検討して本稿を結ぼう。

マーシャルは

Credit may even be impaired by faulty or unfortunate ventures:  
but the evils thus caused are less intense and less far-reaching than

17) ブルーム・フィールド：外国為替相場の理論及び政策（「新しい経済学」Ⅱ…日銀調査局訳 p. 76）

18) ヒックス：貨幣理論（江沢・鬼木訳）p. 236.

they would be if the currency, in terms of which her business transactions are expressed, were distrusted (McC. 225)

と云う。

蓋しリカード(貨幣数量説)の流れに沿ひ或種の方策(現金比率、準備発行等)によって信用貨幣を金属貨幣に依存させるマーシャルとしては当然のことだろう。従って銀行券が金の流入に基いて発行される際(Mcc. p. 57)「銀行券が輸出品の生産又はそれに基づく輸出手形の割引によって供給される」という指摘は彼にはない。

ヒックスは公認の学説として残ったのはリカード主義であったが実際面で成功したのはソートン・ミルの学派だったと云うが、我々は一方に偏ってはならないだらう。

これを高橋泰蔵博士は次の様に云われる。

「ケインズはその『一般理論』の第17章『利子及び貨幣の基本的性質』に於て貨幣利子率を以て凡る財貨について考えられる自己利子率の極限的なものとして説明している。……凡ての財貨を資本財と見ることによって、経済的实践者の行動にとって、より具体的な指標となるものを貨幣利子率に認める事によって、すべての其の機能を異にする財貨を媒介する論理をそこに見出しうる……(中略、ファウスト博士の『初にロゴスありき』に擬せられて)……ロゴスを語とすることは論理的に最初にあるものを貨幣とすることに比しうる。次いで意と訳すことに疑をもち力と訳した事は金利に当たるといえる。意については『凡る物を造り成すもの』であらうかと疑ひ力と訳して『安心出来ない』と迷ひ最後に業と訳して安心を得た事が示されている。この業は信用創造に比定することができる<sup>19)</sup>』と貨幣の深層面を顯示される。

貨幣の属性が力として現われて流動性選好理論となり、それが業として現われると「指図証券説」となる。あるひは通貨の造出面に現われると前者は「債券買オペ論」となり後者は「手形再割引論」となる。

19) 高橋泰蔵；金融論の基本問題(小泉・長沢編)p. 392.

ところで指図証券説の核心は、K・エルスターによると、「クナップは次の疑もなく重要な見解に達した。即ち吾人が支払と称する手続は一つの団体を前提として居ることである。この場合に於てこの団体が国家であるか一の銀行の取引先であるか其他の支払団体であるかという事は何ら関係のない」ことである<sup>20)</sup>。

これは金属貨幣から信用貨幣への進化はより広汎な発展、つまり金融制度の発展の一部にすぎないことを意味する。

我々は先に購買力平價説に於ける為替均衡は貨幣数量説的な均衡であり、金本位制、均衡為替相場（ケインズ）など外から枠組を与えられて始めて一つの完結的なメカニズムを形成すること、及びケインズの枠組の基礎には流動性選好理論があり実物経済と貨幣経済との統合が試みられていると述べた。

然し貨幣は力と共に業としても現われる。

上述せる如く信用創造的接近は金融制度を前提とするが、リカードが明らかにした様に銀行制度の確立と共に銀行が資本の移動を媒介し、商品の需給を調節するがマルクスは之れを更に資本が「各部門の資本家たちの資本所有に比例してではなく、彼等の生産要求に比例して、各部門の使用に任せられるのは信用によってなのである<sup>21)</sup>」と信用貨幣が生産関係を方向づけると注釈している。

これと「商品交換は各共同体が他の共同体と接触する点に始まる。これらの物の量的交換比例は、その初めは全く偶然的なものである。交換は不断の反復によって一の規則正しい社会的行程となる。かくて時経る間に労働生産物は一部分、交換を目的として生産されねばならなくなる<sup>22)</sup>」との

20) K・エルスター：貨幣原論（入沢訳）p. 9。猶、ここで団体とは単なる機構のみでなく、経済生活の Convention も含む。例えばマイクロ会計—原価主義・実現基準、マクロ会計—時価主義・生産基準の場合、単純にマイクロの経済主体に於ける比較貸借対照表から求めた資金繰表を集計して国際収支表を導くが如き（渡辺福太郎「国際経済学」p. 14）はかかる前提を無視している。

21) マルクス；剰余価値学説史、マルクス・エンゲル全集、26、II、（時永訳）p. 273.

22) マルクス；資本論1巻（高嶋訳）p. 58.

指摘とを対照する時、我々は価値形態論、世界貨幣の規定と、それに関連する貨幣の資本への転化という一連の理論構成を得る。

以上、古典派的二分法の統合に当っては貨幣の本質<sup>23)</sup>に対する認識が深く関連する。そしてケインズの統合に併せて信用創造的接近も考慮される必要があらう。

(1973年10月)

23) 杉本栄一教授は問題の所在を「モダン・セオリーについては貨幣数量説の脱却の仕方、マルクス説についていえば数量説批判としての価値形態論(貨幣の必然性如何)の意義、この辺りに両者対決の第一の場がある」(「論争、国際価値論」木下編 p. 206)と指摘される。